

『人は見た目が9割』（竹内一郎著）という本によると、人が他人から受け取る情報の割合は「顔の表情が55%、声の質が38%、言葉の内容が7%」という実験結果があるようです。だとすると、顔の表情や声の質は、その時々心の状態によって左右されますから、私たちは言葉そのものよりも、そこに込められている相手の気持ちをごそ読み取ろうとしているのだと言えます。まさに、「目は口ほどに物を言う」です。一方で、『目玉の学校』（赤瀬川原平著）という本によると、目玉は脳の第一秘書みたいなもので、脳とのつながりは五感のなかでいちばん強いのだそうです。それだけに、目玉は脳に従順で、騙されやすく、極端に言えば、幽霊を見ることだってできるみたいです。つまり、私たちが見ているものは、自分が見たい／見ようと思っているものに基づいて脚色されやすいということです。だとすると、見ている側の心の状態によっても、相手の印象が変わってしまうことになりますから、人が見た目で9割、相手の状態を判断してしまうというのも困ったものです。

本日の箇所には、ユダヤ人の聖地エルサレムに向かう様子を見て、イエスを歓迎しなかったサマリア人と、その彼らを見て、裁きを下そうと進言するユダヤ人であった弟子達の姿が記されています。ここには、サマリア人とユダヤ人との根深い民族的な対立が影響していますが、どちらも「見た目で9割」、相手のことを判断していると言えます。サマリア人は、自分達を救うためにイエスがエルサレムへ向かっていることを知りません。一方弟子たちは、自分達ユダヤ人がサマリア人との対立のきっかけを作り出してきた罪責が見えていません。

イエスが、自分を敵対視するエルサレムへ向かう決意を固められたのは、「天に上げられる時期が近づ」（51節）いたからだとされています。イエスは苦難のなかに、神に祝福された道のみを見ていたのです。また、イエスは、父親の葬儀に行くことよりも先に「神の国を言い広め」（60節）るように求めています。それは、「死」に象徴されるような、人間にはどうしようもできない暗い現実のなかにも、神が見せようとしておられる新しい命の世界、そこに生きる喜びが備えられていることを見出して欲しいと願っておられるからです。

私達には見たい／見ようと思うものしか見られないのだとすれば、それを逆手にとって、見たいと思うものの優先順位を変えてみてはどうでしょうか。色々優先しなければならぬことを抱える私達ですが、だからこそ「しかし、まず」（61節）、イエスが見ている神の国を、ここにも見えるようにして下さいと祈り求め、信仰の目を主に養っていただく者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

